

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 23 日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12950

研究課題名(和文) 旧日本帝国における森林の利用と保全に関する研究 - 地理学、林学、環境史の視点から -

研究課題名(英文) Interdisciplinary study on the use and conservation of forest in the Japanese empire

研究代表者

中島 弘二 (Nakashima, Koji)

金沢大学・人間科学系・准教授

研究者番号：90217703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では戦前戦時期の旧日本帝国の植民地・支配地域における森林の利用と保全の実態を具体的に明らかにし、それらを旧日本帝国の地理的連続性において理解すると同時に、戦後の森林利用・保全との歴史的連続性において理解することを目的とした。その結果、朝鮮、台湾、満州、南方(東南アジア)の各地域のそれぞれにおいて、多様な森林利用が展開されていたと同時に、それらは日本本土における森林利用・森林保全とも連動しながら帝国林業としての結びつきを有していたことが明らかとなった。このような日本帝国時代に形成された帝国林業の人的・知的なネットワークは戦後の日本や東アジアの林業にも一定の影響を与えていることが推察される。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at clarifying forest use and conservation in ex-Japanese empire, and examining both its geographical continuity of the Japanese empire and historical continuity of prewar and postwar period. It can be concluded that actual forest use and conservation in colonies and occupied areas of Japanese empire were closely related with each other in relation to those of Japanese mainland while those forest use and conservation were quite diverse and relatively different from area to area. Furthermore, it can be said that human and intellectual networks of imperial forestry constructed during the era of Japanese empire have a certain influence on the postwar forestry of Japan and East Asian regions.

研究分野：人文地理学

キーワード：帝国林業 日本帝国 森林利用 森林保全 朝鮮 台湾 満州 南方

1. 研究開始当初の背景

アジアにおける森林の利用と保全については、これまで様々な分野で多くの研究が蓄積されてきた。しかしながら、それらの多くは国・地域ごとに別々に研究され、また第二次大戦を境として戦前と戦後に分けて研究されてきた。しかしながら、農業史の野田(2013a,b)は植民地や支配地域を含む旧日本帝国においては総力戦体制と結びついて総体として自然の「資源化」が促進され、これが戦後の資源利用の基礎を形作ったと指摘する。この指摘をふまえれば、戦前・戦時期の東アジア・東南アジアにおける森林の「資源化」を、旧日本帝国という地理的連続性において考えること、そして戦後の森林利用・保全との歴史的連続性において考えることが要請される。また、これまで英帝国の植民地における森林政策と森林保全の関係については、歴史地理学や環境史においていくつもの優れた研究が行われてきたが(Barton 2002, 水野 2006)、Morris-Suzuki(2013)も指摘するように、旧日本帝国に関してはこの種の研究は驚くほど少ない。そこで、西欧帝国主義を中心とするこれまでの「帝国と自然」の議論を相対化し、東アジア・東南アジアにおける森林利用・保全を日本帝国主義との関係から批判的に捉え直すことが今求められている。

2. 研究の目的

本研究では旧日本帝国の植民地・支配地域における森林の利用と保全の実態を明らかにし、それを地理的・歴史的連続性において理解することを目的とする。本研究は旧日本帝国による森林の「資源化」が戦後の東アジア/東南アジアの森林利用・保全に与えた影響を検討する将来の本格的研究を行うための基礎的研究として位置づけられるものである。

3. 研究の方法

本研究では前述の研究目的を達成するために、日本帝国内の各地域の森林利用と保全の実態を明らかにする。具体的には、日本帝国内の朝鮮、台湾、満洲、東南アジアの各地域について、地理学、林学、環境史の研究者からなる研究班を編成するとともに、研究の基礎となる植民地の森林・林業関連の地図資料・文字資料をデータベース化する作業を行う研究班を立ち上げる。

年1回の研究会の開催を通じて各自の研究発表を行い、それぞれの地域で展開される森林利用・保全の実態を総体的に把握することで、旧日本帝国における植民地林業、帝国林業の全体像を体系的に明らかにする。さらに国際学会での研究発表を通じて研究成果を世界に発信することで、「帝国と自然」に関する国際的な議論の場に日本発の新たな視点を提起する。

4. 研究成果

(1) 旧日本帝国における森林の利用と保全について

1) 森林の利用と保全に関する議論

中島は森林の利用と保全の歴史的関係について思想史的に検討するとともに(雑誌論文②)、その基礎となる「自然」概念をめぐって理論的な検討をおこなった(雑誌論文⑥)。また、米家は近代林学における「火入れ」に関する論争を手がかりとして近代日本における草原の「資源化」が意味するところを具体的に明らかにした(雑誌論文⑦)。前述の野田(2013a,b)も指摘するように、帝国林業を理解するうえで「資源化」はキー概念になると思われる。そこでは自然に経済的な価値を付与することと、宗主国日本による植民地(支配地)の「文明化」というベクトルが表裏一体のものとして進行したと考えられる。この点は、近代日本の林学における潜在的な自然植生の位置づけおよび植生変化に関する科学的林業の認識に関する研究(学会発表⑫)にも反映されている。

2) 朝鮮

朝鮮については、本科研のメンバーである竹本が植民地朝鮮における主導的な日本人林業官僚である斎藤音作の思想と実践に関する実証研究をこれまで行ってきたが、それらの成果を踏まえて本科研では日本支配下の植民地朝鮮における森林政策の全体を明らかにした(学会発表⑩)。一方、米家は近代日本における朝鮮地誌に関する研究(学会発表⑥)や植民地期の朝鮮に対する日本人教員の認識に関する研究(雑誌論文⑤)を通じて、近代日本による植民地朝鮮に対する地理的認識や山地や森林をめぐる自然観・社会観を明らかにした。また、植民地期の林学者が朝鮮と台湾の植生変化をどのように捉えていたのかという点について、草原や焼畑を森林の「荒廃」ととらえていた点に着目し、そうした森林荒廃論と森林保全との関係を明らかにした(学会発表④⑩)。

3) 台湾

台湾については、竹本が日本支配下の台湾における森林開発の端緒として本多静六ほかによる玉山の登頂と阿里山森林の発見の過程を具体的に明らかにした(学会発表①)。また、中島は台湾林業試験場の整備過程と同試験場研究報告に掲載された研究論文の内容を検討することで、同試験場が日本帝国内における森林資源開発の拠点としての役割、とりわけ南方における熱帯林業推進のための試験機関としての役割と同時に、台湾の森林保全のための研究機関という役割を果たしていたことを明らかにした(学会発表②)。

また、竹本は台湾での現地調査において植民地期に日本が設立した農林学校で林学を学んだ台湾人へのインタビューをおこない、合わせて日本人の同窓生に関する情報も得ることができた。この点は、戦前と戦後の帝国林業の関連性、継続性を検討するという点

から重要であると思われる。

4) 満州

満州については、永井が戦前の鴨緑江における木材搬出方法に焦点を当てて森林開発の実態を明らかにした(雑誌論文⑧)。また、戦前期の日本と満州との貿易上のつながりから満州での資源利用の実態を明らかにした(学会発表⑦)。さらに、これまでの研究成果に基づいて、『満洲事典』(2018年刊行予定、筑摩書房)において「満洲の自然」「林業開拓団」など満州の森林・林業に関する知見を網羅的に紹介した(図書①)。日本の傀儡国家としてこれまで紋切り型に語られてきた満州における森林利用・森林開発の実態を、より実証的に明らかにすることができた。

5) 南方(東南アジア)

東南アジアについては、中島がまず戦前・戦時期の日本企業による南方森林開発の実態を個別企業の具体的な活動内容に基づいて明らかにした(学会発表⑨)。次いで戦時期における日本による東南アジアの森林利用が日本本土における森林保全と表裏一体の関係にあること、そして総力戦下の森林政策において形成されたそうした枠組みが戦後においても継承されていたことを、戦時期の日本による南方森林開発と戦後の日本企業による東南アジアの森林開発とのつながりを検討することで明らかにした(学会発表⑤⑧)。

6) 帝国林業のネットワークとその継承

本科研において、永井の尽力により、戦前戦時期に満州や朝鮮、台湾、樺太、南方などの外地で林業に従事した関係者とその家族によって構成される「外林会」の関係者とのつながりを持つことができたこと、および竹本がおこなった台湾での調査を通じて農林学校関係者とのつながりができたことは大きな成果である。これまでほとんど解明されてこなかった植民地の林業官僚や林業事業者の具体的な活動内容、および引き揚げ後の日本国内で彼らが果たした役割などを明らかにする重要な手がかりを得ることができたことは、今後の研究の展開に大きく貢献するものと期待される。

日本の林学者や林業官僚が朝鮮、台湾などの植民地で果たした役割については、例えば斎藤音作(朝鮮)や金平了三(台湾)など何人かの人々について本科研においてもその実態が明らかにされつつあるが、その研究蓄積は十分ではない。また、それらの人々が敗戦後に日本の森林利用や森林保全に果たした役割や影響についてはこれまでほとんど未知数であり、この点は次期科研費(基盤B「帝国林業をめぐる知と実践の展開に関する研究」研究代表者・中島弘二)の研究課題に継続・発展させていく予定である。

(2) 帝国林業および森林に関するデータベースの作成

戦前・戦時期の日本帝国の植民地および支

配地域における林業および森林に関する資料および文献はこれまで断片的にしか紹介されておらず、それらを体系的に収集・整理することが求められてきた。こうした要請に応えるべく、本科研では東京大学農学部林政学研究室所蔵の戦前・戦時期の植民地関連の林政資料のデータベース化を竹本が中心となっておこなった。具体的には同研究室所蔵の資料および文献について、地図資料の画像ファイル化と文字資料のテキスト化をおこない、一部はすでに「林政文庫：農林行政史料アーカイブズ」として以下のサイトで公開している。

<http://fpacl.lib.a.u-tokyo.ac.jp/FPA/docs/index.html>

(3) 「帝国と自然」に関する日本の研究成果の海外への発信

本科研メンバーは国際学会において積極的に本科研の研究成果を発表するとともに、海外の研究者との研究交流を進めた。具体的には2015年7月にロンドンで開催された国際歴史地理学会(米家)、10月に香川県高松市で開催された第3回東アジア環境史学会(中島、米家、竹本)、2016年8月に北京で開催された第33回国際地理学会議(中島)においてそれぞれの研究成果を発表した。そして、本科研の研究成果の総まとめとして2017年10月26日-30日に中国・天津市で開催された第4回東アジア環境史学会において、本科研メンバーが主宰するセッション‘Use and conservation of forest in empire: Imperial forestry of Japan and Britain’をおこない、中島、米家、竹本に加えて英帝国史を専門とする水野祥子も発表を行った。帝国林業をめぐる英帝国と日本帝国の比較研究という観点からのセッションは、多くの参加者を迎えて次期科研につながる実りある議論ができた。また、この学会で台湾や韓国など海外の研究者と研究上の交流ができたことも大きな成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

①永井リサ、農林業関連行政文書の整理について、レコード・マネジメント、査読あり、75、2018年(掲載決定)

②中島弘二、環境保全と「ワイズユース」、地理科学、査読あり、72-3、2017年、182-194

③竹本太郎、「飯能の西川材関係用具」コレクション、森林科学、査読なし、81、2017年、44-45

https://doi.org/10.11519/jjsk.81.0_44

④米家泰作、網野善彦の「山民」概念、歴史

⑤丁致榮・米家泰作、1925年・1932年の日本の地理・歴史教員らの韓国旅行と韓国に対する認識（韓国語）、文化歴史地理、査読あり、2017年、1-20

⑥中島弘二、自然の生産と消費―「自然の地理学」の視点から―、E-journal GEO、査読なし、11-1、2016年、348-351
<http://doi.org/10.4157/ejgeo.11.348>

⑦米家泰作、草原の「資源化」政策と地域―近代林学と原野の火入れ―、歴史地理学、査読なし、58、2016年、19-38

⑧永井リサ、海を渡った日本の筏―戦前鴨緑江における日本式筏の導入過程について、善隣、査読なし、469、2016年、2-9
<http://www.kokusaizenrin.com/2016/nagai.pdf>

〔学会発表〕（計12件）

①竹本太郎、統治初期台湾における玉山の登頂と阿里山森林の発見、日本森林学会、2018年3月

②Koji Nakashima、Locating tropical timber in the empire: the Forestry Research Institute of the Japanese Government-General of Taiwan and its Researches、The Fourth Conference of East Asian Environmental History、国際学会、2017年10月

③Taro Takemoto、Utilization of Firewood and Fodder in Crown Land and Designation of Forest Reserve in Yamanashi Prefecture in the early 20th Century、The Fourth Conference of East Asian Environmental History、国際学会、2017年10月

④Taisaku Komeie、Devastation and indigenous people in colonial forestry: Representations of Taiwanese and Korean vegetation change in the Japanese Empire、The Fourth Conference of East Asian Environmental History、国際学会、2017年10月

⑤中島弘二、「南方森林資源」開発と日本林業―帝国林業の継承―、日本地理学会 2017年春季学術大会、2017年3月

⑥米家泰作、近代日本における朝鮮地誌の出版とその系譜、日本地理学会 2017年春季学術大会、2017年3月

⑦永井リサ、20世紀初頭における中国東北地域から鹿児島への獣骨輸出について、日本

⑧Koji Nakashima、Inheritance of imperial forestry: Japan's tropical forest development in Southeast Asia、The 33rd International Geographical Congress、国際学会、2016年8月

⑨Koji Nakashima、Forestry development in Borneo and a fate of tropical forest: a case of Japanese forestry company、The Third Conference of East Asian Environmental History、国際学会、2015年10月

⑩Taisaku Komeie、Scientific forestry and historical vegetation change: imagining forest zones and environmental deterioration in the Japanese empire、The Third Conference of East Asian Environmental History、国際学会、2015年10月

⑪Taro Takemoto、Forest policy in colonial Korean peninsula 1910-1936、The Third Conference of East Asian Environmental History、国際学会、2015年10月

⑫Taisaku Komeie、Japanese scientific forestry and reconstruction of potential vegetation: mapping forest zones and environmental change、16th International Conference of Historical Geographers、国際学会、2015年7月

〔図書〕（計2件）

①井村哲郎、川島真、鈴木貞美、劉建輝、永井リサ、筑摩書房、満洲事典、2018年刊行予定、800ページ

②Makoto Inoue, Ganesh P. Shivakoti, Haruo Saito, Taro Takemoto、SAGE Publications Pvt. Ltd、Multi-level Forest Governance in Asia: Concepts, Challenges and the Way Forward、2015年、508ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 弘二 (NAKASHIMA, Koji)
金沢大学・人間科学系・准教授
研究者番号：90217703

(2) 研究分担者

米家 泰作 (KOMEIE, Taisaku)
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10315864

竹本 太郎 (TAKEMOTO, Taro)
東京農工大学・農学研究院共生持続社会学
部門・講師
研究者番号：10537434

永井 リサ (NAGAI, Risa)
九州大学・総合研究博物館・専門研究員
研究者番号：60615219

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()